

被災地のいま

被災地に、そして日本という国に多くの被害をもたらした3月11日の東日本大震災から一年半が経過しました。復興は目に見えるところと見えないうところ、少しずつ確実に進んでいます。9月1日は防災の日。私たちにできることは何か、改めて考えてみませんか。
*写真は7月18日〜20日に撮影したものです。



現実

最大で20mを超える津波に襲われ、壊滅的な被害を被った大槌町。死者・行方不明者は1,256人で、町の人口の7.8%。家屋の全壊・半壊は3,878棟で、全家屋の59.8%が被災。8月16日現在、町内48箇所に4,675人が不便な仮設住宅での暮らしを強いられている。写真は、大槌町の中心部。がれきが撤去され基礎だけが残った市街地は、至るところに生えている雑草の緑がもなしく見える。



基礎だけが残った家の玄関部分に子どもの自転車が(石巻市)。



震災当日の様子を伝える大槌町役場。



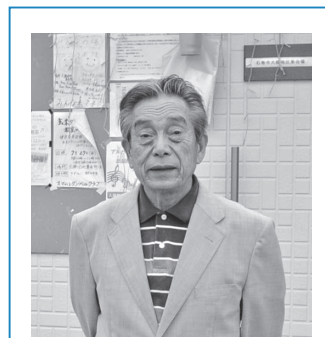
多くの子どもが犠牲になった大川小学校の慰霊碑(石巻市)。



今なおガレキとともにある、被災地の生活(気仙沼市)。



橋の橋脚以外の構造物が全て流された南三陸町歌津地区。人の気配が感じられない。



● 仮設大橋団地自治会長・山崎信哉さん(石巻市)

震災直後から昨年夏ぐらいまで、避難所で一番悩まされたのはトイレの問題でした。水が出るようになるまで解決しませんでしたね。仮設住宅は、いろいろな価値観や生活習慣が身に染み付いた方々の集まりなので、「ダメです」という言葉は使わないようにして、繰り返しお願いすることで仮設団地のルールに協力してもらっています。今回の震災で痛感したのは、事前の準備の大切さです。仮設住宅は、どう作ればいいのか、シュミレーションしておくべきだと思います。備えは大切です。



死者・行方不明者は3,595人・津波による浸水面積は73km²・被災家屋は合計53,742棟と、単一の市町村として最大の被害を被った石巻市。写真は土砂が多く混ざった1次ガレキの山。被災地ではこのガレキの山を分別して2次ガレキとし、焼却・再利用・埋め立てといった処理が進んできている。



震災後まもなく配管工を営んでいた方が自身の土地に作成した
モニュメント(石巻市)。



大槌町の仮設店舗



●木村均さん(石巻市)

仮設商店街「石巻まちなか復興マルシェ」を運営しています。観光客だけでなく地元の人も集まる場所にして、賑わいを創出する拠点になることを目指しています。現在は7店舗ですが、今後拡大して石巻商業を発展させるとともに、復興の礎を築きたいですね。

●小川勝子さん(大槌町)

震災で妹を亡くし「せめて味だけでも残したい」と思って、妹の店を引き継いでいます。この店の家具のほとんどは、埼玉の人が送ってくれました。たくさんの人の支援で、店を出すことができて感謝しています。大槌に来たら、妹の味をぜひ楽しんでくださいね。



「なつかしい未来へ」被災地の復興が1日も早く実現することを願う(南三陸町)。



大船渡市街から海沿いの道を走らせると、カキやホタテの養殖をしている無数の浮きが見えた。



石巻市内にあったポスター



南三陸町内の道路沿いに書かれた「全世界のみなさんありがとう!」の文字。文字の下にある線のように見えるものは、全て折り鶴。



●石巻市に半年間派遣されている川越市職員の荒井敏江さん(写真右)・戸館貴之さん(写真左)

石巻市の被災した住宅の取り壊しなどに関わる事務をしている荒井さんは「目にする風景や耳にする話などから、精神的に学ぶ機会が多いです。また、表面的には元気でも、立ち直れない人が大勢います」。石巻市のシンボル「石ノ森萬画館」の修復工事などの監理を行っている戸館さんは「復興のために『頑張ろう』は良い言葉です。でも、石巻市の皆さんは、すごく疲れている様子。『頑張らずにすぎた人』がたくさんいます」。



●大槌町に1年間派遣されている川越市職員の小林武さん(右から2人目)・松下裕生さん(右から4人目)・小林豊さん(右から5人目)

全国自治体の派遣職員と共に、壊滅的被害を受けた大槌町中心部の土地区画整理事業など、復興のまちづくりを行っています。「被災地の現状を見て、継続したサポートが必要なことを知ってほしい」と小林武さん。「日々被災地の現状と向き合うのはつらいですが、復興を一步でも前に進めたい」と松下さん。「ガレキが片付き、住宅が建ち、町が再建されても、住む皆さんの心の傷が癒されるまで復興とは言えない」と小林豊さん。